

福島県における石製模造品の様相

—建鉾山祭祀遺跡出土遺物を中心に—

佐久間 正明

はじめに

古墳時代の考古資料のうち、福島県での動向が注目されるものの一つに石製の祭祀遺物「石製模造品」がある。白河市表郷の建鉾山祭祀遺跡からは多量の石製模造品が出土し、祭祀遺跡の研究に欠くことのできない遺跡として古くから認識されている。また郡山市の正直A・B遺跡と正直古墳群からは、石製模造品を製作した工房跡、石製模造品を使用した祭祀跡と、葬送儀礼が行われた古墳が調査され、石製模造品の製作から使用・副葬の状況が具体的に把握できる数少ない遺跡として注目されている。今回、建鉾山祭祀遺跡を中心とする福島県内の遺物を取り上げ、その重要性について考える。

I 石製模造品とは

（1）定義と名称

「石製模造品」とは一般に滑石あるいは蛇紋岩と呼ばれる軟質の石材により、農工具・武具・容器などさまざまな器物をかたどったもので、概ね4世紀後半に出現し、5世紀に盛行する。古墳・集落遺跡・祭祀遺跡など様々な場所から出土し、葬送・祭祀などの場面において使用された重要な遺物である。

石製模造品は、カミ観念が発達し体系的に整理されていく段階の中で生まれた、精神的側面を象徴する祭祀遺物といえる。祭祀遺跡における石製模造品は、集団の繁栄や安寧、災厄の除去などが目的とされ、カミへの捧げ物。その際の祭具・祈りの道具と考えられる。

石製模造品の種類には、刀子・斧・鎌・ヤリガンナ・杵といった農工具、剣・短甲などの武器・武具、あるいは鏡・槽・下駄・堅櫛・機織具などがある。なお、同じ石材で製作され密接な関係にあるものに、勾玉・紡錘車・石枕・白玉などがある。

名称については、「石製品」・「石製模造品」・「石製模造器具」・「滑石製品」・「滑石製模造品」あるいは「石製葬祭具」・「石製祭具」・「石製装具」など、実に様々な名称が使用されている。こうした名称が用いられるのは「定義の曖昧さ」が存在するため、各研究者はこうした名称を「便宜上の措置」として使用している。「用語」と「概念」を明確にし、統一を図ることは、多くの研究者が抱いている共通の課題である。

（2）研究史的意味合い

3世紀中頃から7世紀におよぶ古墳時代、特にその前半代においては首長が司祭者的性格を帯びていると考える研究者は少なくない。古墳における儀礼とは葬送儀礼であり、祭祀的意味合を強く帯びていることは言うまでもない。弥生時代から古代にかけては、自然やモノなど周囲のあらゆるものに神が宿るという観念が形成され、古墳時代の人々にとって神や精霊といったものは、現代よりはるかに身近な存在であったと考えられる。

石製模造品は、これまで「畿内政権の東国支配強化の手段」、あるいは「東日本への埋葬イデオロギーの移植」と表現されたように、畿内政権による東国経営の象徴の一つと説明されてきた。こうした研究動向の中、最近では受け入れ側である地域の主体性を重視する視点での検討もなされている。

中央からの視点と地方からの視点は、視角こそ違えるものの、石製模造品を王権の祭祀に関わる貴重な遺物と認識し、その重要性を認めることでは一致する。

Ⅱ 列島における石製模造品の展開

古墳と祭祀遺跡は、いずれも古墳時代を考える上で重要な要素である。石製模造品は、その両者を共通して分析できる数少ない遺物の一つであり、古墳時代中期を代表する祭祀遺物である。そして、畿内を発祥の地とし関東地方で盛行することから、大和政権の東国に対する勢力伸長を反映するものと理解されてきた。この考えは、今日にいたるまで基本的な視点として受け継がれている。

(1) 古墳出土の石製模造品

石製模造品の出土した古墳の分布を概観すると、群馬県中西部・千葉県東京湾沿岸と古香取海南岸における集中、そして大和盆地を中心とする畿内の集中がより明確となる。

葬送における石製模造品は、刀子形・斧形・鎌形といった農工具のセットが基本となる。刀子形を含むセットは福島県塚野目11号墳・真野49号墳などの福島県北部でも確認される。一方、西日本では、岡山県金蔵山古墳と香川県岩崎山1号墳で刀子形と鎌形のセットは見られ、刀子形単体が広島県龜山1号墳で出土しているものの、刀子形を含む農工具のセットは広島県以西の首長墳では確認されていない。このように、葬送における石製模造品は東に遍在することが明瞭である。刀子形などの農工具を含まず剣形や有孔円板のみが出土する古墳は、福岡県の奴山正園古墳を初め、西日本のいくつかの古墳があるものの、その遍在性を覆すまでには至らない。西日本においては、葬送時の石製模造品を使用した儀礼が積極的には導入されなかったと言える。

このように、西日本では九州地方北部でも古墳から石製模造品が出土する事例は多いものの、その内容は畿内から東日本にいたる基本セットと異なり、有孔円板が少量出土することが基本となる。そのため、東と西とでは古墳における石製模造品のありかたが異なると考えられる。

(2) 集落・祭祀遺跡の石製模造品

上述したように、石製模造品の動向を概観すると、関東地方及び近畿地方に集中した分布が指摘される。このことは先学によりたびたび述べられてきた。こうした大前提の一方、九州地方北部での分布も無視することはできない。関東地方に比べると出土遺跡数の差は大きく、比肩する状況にはないものの、大和政権の中心地たる畿内から離れた地方における分布のあり方として、大局的には共通する側面を指摘できる。

列島の東西で共通性が指摘できることは、大和政権が周縁地域に対して行った祭祀的な意味合いからも興味深い。周縁部に目を向けると、東方では長野県神坂峠遺跡や福島県建鉾山祭祀遺跡があり、さらに山形県八幡山遺跡がある。西方では、愛媛県出作遺跡そして韓国西岸に竹幕洞遺跡がある。祭祀遺跡は様々な性格が想定されるが、そうした中、周縁部における祭祀遺跡は規模が大きいことは指摘できる。

一般的な理解として祭祀遺跡は、西方においては先進地（大陸・半島）への過渡地域として、東方では辺境に対峙するものとして理解される。しかし、「中央の大和政権とそれに対する周縁部」という構図において、両者は共通する内容を持つ。石製模造品の出土する祭祀遺跡は全国で確認されているが、刀子形・斧形・鎌形などの農工具形を多数出土する祭祀遺跡は建鉾山祭祀遺跡・神坂峠・入山峠などに限られ、その主なものは周縁部に形成されるという点は重要である。

石製模造品を使用する葬送儀礼は主に東日本の首長層に向けられたものであり、それを受容した関東地方を中心とする地域の首長たちは、畿内を凌ぐほどの展開力をみせ発展させる。それに呼応するように、石製模造品を使用した祭祀儀礼も数多く行われ、祭祀遺跡が形成されていく。その際、境界・峠・神奈備山・磐座・湧水という対象から祭祀の場が決定付けられ、そこでは飲食儀礼を伴う場合もあった。一方、西日本においては、葬送儀礼での導入は東日本に比して進まなかったものの、祭祀儀礼は東日本と同じように各所で行われるようになる。

首長の墓所である古墳において、葬送具は首長層に限定される。これに対し、共同体の繁栄や通行の安全を祈ることを主な目的と考えられる祭祀場の祭祀具は、広く共同体の成員全てが対象となる。そうした相違はあるにせよ、いずれも儀礼を主導したのは首長層であることに変わりはない。つまり、祭祀を執行する首長は司祭者としての性格も有していた可能性が高い。葬送と祭祀は広義の「祭祀」に含めることが可能で、いずれも首長層が推し進めたものであり、広義の祭祀権は司祭者たる首長に属していたと考えられる。

III 東北地方における石製模造品の展開

(1) 正直古墳群

正直古墳群は福島県郡山市田村町に所在する古墳群で、50基前後の古墳が尾根上に数基のグループを形成するように築造されている。古墳の埋葬施設は堅穴系埋葬施設に限られ、築造時期はほぼ5世紀代に比定される。

古墳群は、立地上のまとまりなどから、支群A～Hにグルーピングが可能である。支群B～Gと支群Hとは質的に異なる点を指摘できる。その一つは時期的な問題であり、支群B～Gは相対的に古く、支群Hは新しく位置付けられる。もう一方の特徴は立地場所である。支群B～Gは丘陵中央部から東・北側の丘陵先端に近い位置に分布している。その中でも支群B・F・Gは、東側へ向かって緩やかに伸びる樹枝状の丘陵上に築造され、さらにそれぞれの支群中最大の古墳である支群Fの21号墳・支群Bの27号墳・支群Gの10号墳は丘陵の先端に築造されるなど多くの共通点を抽出できる。他方、支群Hは丘陵中央部から南西の平坦面に築造され、支群B～Gのあり方とは異なる。

こうした古墳立地条件の違いは集落の動向と連動している可能性がある。正直古墳群の母胎となる二つの集落は、正直B遺跡が5世紀前葉に遡り、正直A遺跡が5世紀後半を中心とし時期を多少異にしている。古墳との関係から捉えると、支群F・B等と正直B遺跡、支群Hと正直A遺跡が、時期の上では強い関連が読み取れる。

小首長墓と考えられる古墳のうち、支群Cの27号墳と支群Dの23号墳そして支群Eの30号墳からは刀子形の石製模造品が出土している。これに対し、階層的に下位に位置付けられる支群Hの11号～13号・15号墳では、刀子形の石製模造品は確認されていない。【古墳の規模に現れる階層性と刀子形出土の有無は相関関係】にあると言える。

やや大型の円墳を中心に3・4基から成る支群は、首長とその近親者の古墳という想定がなされる。そして小円墳が密集する支群は新たに成長した有力家長層の墳墓という意味付けがなされ、古式(初期)群集墳と言い換えられる。また、前者は古相を示し、その内容からも古式(初期)群集墳盛行以前の可能性がある。

(2) 正直A遺跡

正直A遺跡は、正直古墳群と谷を隔てた西側、阿武隈川の氾濫原に面する丘陵上に位置し、両側を開析谷に挟まれている。ほぼ全域にわたり試掘調査がなされ、遺跡の西南部を中心に発掘調査がなされた。その結果、総数97棟の住居跡が検出され、5世紀後半から6世紀初頭の堅穴住居が57棟確認された。なお、正直A遺跡の範囲内にはいわゆる“正直祭祀遺跡”とされる地点があり、石製模造品が多量に出土する遺跡として古くから知られている。正直A遺跡は、石製模造品を用いる祭祀を考える際、遺構群を有機的に捉えることのできる貴重な事例であることが分かる。

5世紀前半を中心とする時期は支群B～Gの築造母体となった集落が正直B遺跡内にあり、5世紀後半を中心とする時期は支群Hの築造者が正直A遺跡を居住域としていたと言い換えることができる。このことは、【墓域における構造の変化が集落の立地と対応】していることを表している。

特徴を同じくする遺物の存在から、集落内部の工房跡で製作された石製模造品が祭祀(1号祭祀跡)に供給されることが明らかで、【製作遺構と消費遺構】という結び付きを論じることができる。

石製模造品による祭祀は、単独で出土することは少なく、多くの場合土器を伴う。土器の器種は高坏や碗坏の供膳具とともに壺などの貯蔵具を伴う。福島県内では、須賀川市上ノ台遺跡1号溝、白河市舟田境遺跡1号祭祀などで、【大型の壺が共伴する祭祀】が知られている。

祭祀(1号祭祀、“正直祭祀遺跡”)は【湧水を対象とする祭祀】の可能性が高い。古墳時代において、いわゆる「水辺の祭祀」と呼ばれる祭祀については、穂積裕昌氏の精緻な論考がある。それによると、自然の河川脇で行われたものと、河川や溝の源流域や湧水点で行われたものに大別される(穂積2012)。正直A遺跡では、調査区内部の埋没谷、あるいは西側の開析谷に、自然湧出の場所があったと想定され、それらを対象とした祭祀であったと考えられる。

5世紀後半代を中心とする時期、集落は谷を挟んだ南西側に移動し正直A遺跡が営まれる。墓域は集落と谷を挟んだ丘陵に位置する。古墳の様相はそれまでと異なり、階層性をもった数基の円墳という構造から、中・小の円墳が密集・群集するという構造に変化する。その築造主体は新興の中小首長層や有力家長層であった。そうしたあらたな階層が生まれる要因は、鍛冶の技術・竈、そして須恵器などといった5世紀前葉から始まる文物・技術の伝播(導入)が一因である可能性が考えられる。小円墳から成る古墳群出現の背景には、和田氏が「中期における文化的・社会的開明とそれによってもたらされた生産諸力の発展」を想定したように(和田1992)、5世紀前葉から始まる文物・技術の伝播(導入)が一因である可能性が考えられる。

(3) 八幡山遺跡

八幡山遺跡は山形県尾花沢市大字上柳渡戸に所在する、石製模造品が多数出土した祭祀遺跡である。八幡神社の数十m西側の西へ向かう緩斜面、盆地を望む場所に位置し、山形県と宮城県を結ぶ古代より重要な地点上に位置する。

石製模造品を使用した祭祀が列島各地に波及する時間は地域によりわずかに異なるものの、建鉾山祭祀遺跡など東北地方の祭祀遺跡の中にも比較的早い段階に出現する遺跡もある。一方、終焉の時期は明らかに異なる。石製模造品の盛行する関東地方では6世紀後半あるいは7世紀初頭まで大規模な祭祀遺跡が形成される。これに対し東北地方では、5世紀末から6世紀前半頃には終焉を迎える。石製模造品を使用した祭祀が列島各地に導入される過程で山形県内へもその波は到達するが、継続する期間は短い。こうした様相は山形県における石製模造品祭祀の特徴の一端を示すものと言える。

山形県内でもこの時期、竈の導入、高坏から椀坏への供膳形態の変化、須恵器の普及など、様々な文物の波及が見られる。それらの先進的な文物にわずかに先んじて出現したのが石製模造品である。石製模造品はカミ観念が発達し体系的に整理されていく段階の中で生まれた、精神的側面を象徴する祭祀遺物である。祭祀遺跡における石製模造品は、集団の繁栄や安寧、災厄の除去などが目的とされるものの、遺跡・遺構によりその目的は微妙に異なっていた。特に交通の難所や境界の祭祀遺跡は「あらぶるカミ」から身を護ることも大きな目的の一つであった。

文物の流入経路にあたる八幡山遺跡では、石製模造品は主に交通の安寧を祈願したカミへの捧げ物、その際の祭具・祈りの道具に他ならない。

共通する石製模造品の特徴から、八幡山遺跡の成立の背景には、宮城県色麻町の念南寺1号墳や福島県本宮市の天王壇古墳に葬られた首長、建鉾山祭祀遺跡で祭祀を行った首長が関わっていた。また八幡山遺跡は5世紀における先進文物が当地に及ぶ際の端緒となるもので、当時の政権の勢力伸長を物語る祭祀遺跡である。その祭祀の導入段階にあつては石製模造品製作者の招聘・移動などが想定されるが、祭祀を執り行ったのは最上川流域に住まう首長層であった。神坂峠・入山峠の成立には、峠の東側つまり大和より遠い側の人々の意図が強く働いているという。これは建鉾山祭祀遺跡・八幡山遺跡でも同様であり、後に拓かれる東山道ルート上の境界・重要地点に位置する祭祀遺跡の共通した性格を表わすものと考えられる。

(4) 本宮市・大玉村地域と、いわき市北部

郡山市南東部と、大玉村・本宮市、いわき市北部の在り方を比較すると、いくつかの共通点が顕著に現れる。まず挙げられるのが、地域の単位となる盆地あるいは沖積地などの外縁に現在も石材を採取できる場所が存在することである。さらに重要な点は、石材の産出地を当時の人々も認識していたと考えられる点である。集落の周辺は狩猟・採集などが行われる生活圏でもあり、集落からそれほど離れていない採取地の存在は当然把握していたと考えられる。さらに今回の対象地域では、いわき市の玉山古墳（前方後円墳・112m）、郡山市の大安場古墳（前方後方墳・84m）が石材産出地に続く小河川や沢沿いに築かれ、大玉村の傾城壇古墳（前方後円墳・42m）では古墳の周辺で石材が採取されることから、産出地の存在を知り得たと考えるのが妥当である。

集落から出土した製品あるいは工房跡の原石・剥片などの石材は、いずれも近隣の産出地で採取可能な石材であり、遠隔地から石材を運び入れた痕跡は見られない。そのため、近隣の石材産出地から採取された原石が集落に運ばれ、製作そして消費（古墳における副葬、集落・祭祀遺跡における使用・廃棄）されたと考えるのが最も合理的な解釈である。

石製模造品が多量に出土する関東地方でも、石材採取から消費にいたる一連の流れが明らかなのは、背後に三波川帯を抱える群馬県西部のみで、他の地域については不明なところも多い。一方、茨城県北部や千葉県南部あるいは群馬県北部や神奈川県西部などでも蛇紋岩や滑石の分布が明らかとなってきたものの、そこから石材が採取されたかは未だ不明である。今回対象とした地域は、地形的にも小地域で完結する範囲であり、広大な関東地方と直接対比できるものではない。しかし、石材採取をはじめとする石製模造品の製作動向を考える上で、大きな理解を提供する。

IV 建鉾山祭祀遺跡

建鉾山祭祀遺跡を抜きにして古墳時代の祭祀を語ることはできない。こうした認識は決して言い過ぎではないものの、その重要性に比して実証的な研究は停滞してきた感が否めない。

(1) 白河市周辺における4世紀末～5世紀初頭の動向

建鉾山祭祀遺跡の出現期あるいは先行する時期、阿武隈川本流域では、装飾の施された刀子形が出土した坊主（子）山遺跡がある。舟田境遺跡は5世紀第一四半期と考えられ、立地からは水に関する祭祀の可能性がある。また舟田中道遺跡からも同時期の住居跡が確認されている。

建鉾山祭祀遺跡に隣接する三森遺跡では、5世紀中葉を中心とする方形区画、及び集落の内容が明らかにされている。久慈川流域では小規模な円墳群の一基と考えられる塚原古墳から、東北地方では最も初期に位置付けられる剣形石製模造品が出土している。

建鉾山祭祀遺跡の周辺では、その出現以前に遡ると考えられ石製模造品が見られる。そのため、建鉾山で祭祀が行われる素地が既にあり、大規模な祭祀が執行されたことが窺える。

(2) 過去の調査と概要

建鉾山祭祀遺跡は福島県白河市表郷に所在する。建鉾山は武鉾山・高野峯山・尊登山などの別称・古称があり、円錐状の形状を呈している。遺跡の北面では東流する阿武隈川の支流・社川が沖積面を形成し、山頂とは比高差約100mを測る。山頂には建鉾石とよばれる立岩があり、遺跡は山の北側の緩斜面にある。なお建鉾山の東方400～500mには、古墳時代の首長居館と考えられる方形区画が確認された三森遺跡がある。

この建鉾山祭祀遺跡及び三森遺跡については、首藤保之助氏による遺物採集の記録が残され、その年代は1937年にさかのぼる。さらに1939年には國學院大學の大場磐雄氏により調査が行われている。

その後、1957年と1959年に國學院大學の亀井正道氏により本格的な調査が行われた。その際、建鉾山祭祀遺跡は「高木地区」、三森遺跡は「三森地区」と呼称されている（亀井1966）。

建鉾山の東側約300mにある三森遺跡の面的な調査が実施され、ほぼ同時期の5世紀に営まれた遺跡の内容が明らかにされた。その成果は、建鉾山祭祀遺跡を考える上で、示唆に富むものであった。大型方形区画（一辺46.5m）・長方形区画（24×18m）・長方形の二重柱列区画（短軸20m）が発見され、一辺が13mを測る大型の堅穴住居跡も2棟検出された。出土遺物には韓式土器、羽口など特徴的な遺物も多数含まれる。遮蔽施設による「祭祀の場」、方形区画の「居館」、工房跡の「生産遺構」が確認された点は重要である。地域の中核ともいえる首長居館が隣接することは、建鉾山祭祀遺跡の成立に、この居館の首長が重要な役割を担っていたことを暗示する。

(3) 多角的な視点で捉える建鉾山

建鉾山祭祀遺跡には三つの関係が読み取れる。特徴的な刀子形・鞘部列点類型の分布から、建鉾山祭祀遺跡・天王壇古墳・雷電山遺跡に強い結び付きが読み取れ、【阿武隈川流域を中心とする紐帯】が指摘できる。阿武隈川流域で確認される方形突出部二孔類型、方形突出部二孔突起類型の刀子形は、毛野西部に系譜を辿ることが可能であり、【上毛野からの影響】が考えられる。現在のところ石製模造品の中に、畿内との直接的な関連を示すものは見出せないが、祭祀遺跡成立の背景に【大和政権の意図】があり上毛野の首長がその導入に主導的役割を担ったと解釈される。

東国に見られる首長層と祭祀遺跡との関係は、建鉾山祭祀遺跡に代表されるように、祭祀遺跡が在地の一首長により成立したのではなく、複数の首長層との関係の上に成立したという構図を復元することが可能であった。

遺跡を微視的な見地から見た場合は【地域の中心地】という性格が見える。神南備形の建鉾山は下野・常陸からの両ルートに臨む要衝にあり、首長居館の可能性のある方形区画も隣接して存在する。こうした状況からは、祭祀遺跡が地域において最も求心力が働く「特別な場」という性格が必然性を持って浮かび上がる。

列島的な巨視的な見地からは、建鉾山が陸奥への【玄関口】にあたり、その扉は上野と阿武隈川流域、そして仙台平野を繋ぐものであることは議論の余地がない。それはまさに後の東山道のルートにあたる。5世紀における毛野から仙台平野への古東山道ルートには渡来系文物が色濃く残り、重要な位置を占めたとの指摘は多い（亀田2003）。建鉾山はまさしくこのルート上に位置する。

（４）建鉾山祭祀遺跡の展開過程

建鉾山祭祀遺跡の展開を考える時、祭祀を行った地域首長層の動態から、大きく四つの時期に分けられる。まず【建鉾山成立直前の段階】では、写実性の高い刀子形の特徴から坊主子山遺跡と日下ヶ塚（常陸鏡塚）古墳の関連が窺えるものの、点としての結び付きが想定されるのみである。そのため、積極的な交流は次の段階を待たなければならぬ。なお、建鉾山での祭祀は突如として出現すると捉えられる場合が少なくないが、遺跡の周辺では、建鉾山祭祀成立以前に石製模造品が導入され、建鉾山で大規模な祭祀が行われる素地が既にあったことを指摘できる。

【５世紀前葉～前半】に建鉾山で石製模造品を使用する祭祀が始まる。祭祀の導入を主導したのは群馬県的首長層であり、そこには石製模造品製作工人の派遣なども想定される。建鉾山に拠点的な祭祀が出現したのは、いくつかの要因が重なったことによる。一つはその秀麗な山容にある。祭祀の場を選定するに際し、建鉾山が偶然選ばれたのではなく、大和における祭祀の拠点であった三輪山を思わせる神南備形の山容が選ばれた。地理的な見地からは、建鉾山が栃木県・茨城県からの両ルートに臨む要衝に位置する点が重視されたであろう。こうした地域の視点とは異なる列島の見地からは、建鉾山が東北地方と関東地方の玄関口にあたり、その扉は群馬県と阿武隈川流域、そして仙台平野を繋ぐものである点が重視される。そのルートは当時の大和政権が重視した内陸の交通路であった。

そして、東北地方南部の各地へ石製模造品が導入される際、群馬県的首長による働きかけを受けた三森の首長が実質的な役割を担った可能性が高い。さらに、建鉾山祭祀遺跡形成の中心となった三森遺跡が、東北地方南部における石製模造品の拠点の一つとなり、そこから周辺の首長に、情報発信・製品移動・工人派遣などを行った可能性もある。また、三森遺跡では鍛冶関連遺物や銅地金なども確認され、先進技術・新来の文物が三森遺跡を経由して東北地方南部の各地へもたらされた可能性が高い。

【５世紀中葉から後半】にかけて、群馬県的首長層との関係性は継続するものの、それ以上に地域における首長との関係性が強く見られるようになる。初期の人物埴輪が樹立された天王塚古墳に葬られた首長や、短甲形・盾形等の石製模造品を多量に出土した雷電山遺跡で祭祀を行った首長との関係性が見られるなど、地域における上位階層の首長との繋がりが顕著に認められるようになる。建鉾山祭祀遺跡の成立を主導した群馬県的首長層との繋がりは維持しながらも、阿武隈川流域の首長層との紐帯を強め、阿武隈川流域から栃木県中央部における中核的な位置付けとなる。三森遺跡が、東北地方南部における石製模造品の拠点的な情報発信の地であったことに変わりはない。

【５世紀後葉～６世紀初頭】、石製模造品の意義が相対的に低下するという変化に歩調を合わせるように、群馬県や阿武隈川流域との関連が希薄になる。そして、それまでにあまり見られなかった、茨城県や太平洋沿岸部との関係性が見られるようになる。ただ、それらは前代のように地域を代表するような古墳に埋葬される首長ではなく、相対的に下位に位置付けられる首長層との結び付きと考えられる。

このように、時間の進展とともに、繋がりを持つ地域も「内陸部（群馬県－阿武隈川流域）→内陸部（阿武隈川流域－栃木県）→沿岸部・茨城県」と変化し、関連する首長層の階層も相対的に低いものとなる。建鉾山祭祀遺跡は、５世紀代を通して拠点的な祭祀という重要性は変わらないものの、その様相は一貫したものではなく、時間の推移とともに変化する姿を読み取ることができる。

こうした建鉾山祭祀遺跡の変遷は、地域内部の動きを示すに留まらず、先進地たる群馬県、あるいは畿内における政権中枢の動きに連動している可能性が高い。建鉾山祭祀遺跡の遺物と遺構に内包される情報は、石製模造品を用いる祭祀が列島各地に展開する動向を敏感に示すものと言える。

関東地方の首長は、畿内を凌駕するほど数多くの石製模造品を製作し、独自とも言える展開をみせる。そうした中、東日本における一つの核になった場所が建鉾山であり、その精神的イデオロギーを支えた祭祀遺物たる石製模造品も重要な役割を果たした。その際、主導的な役割を担ったのは毛野の有力首長であり、その下で在地の首長が必要な整備を進めていた。５世紀、畿内から毛野そして東北地方へと至る古東山道ルートが重要視される歴史的背景の中で、必然性を持って成立した遺跡なのである。

[引用・参考文献]

- 大賀克彦 2008「成塚向山1号墳出土の玉類～滑石製品の出現と生産に関する認識を中心に～」『成塚向山古墳群』群馬県埋蔵文化財調査事業団 499-516 頁
- 亀田修一 2003「陸奥の渡来人（予察）」『古墳時代東国における渡来文化の受容と展開』専修大学文学部 55-65 頁
- 篠原祐一 1997「石製模造品剣形の研究」『祭祀考古学』創刊号 祭祀考古学会 25-47 頁
- 清喜裕二 1998「関東・東北地方の石製品―前期古墳から中期古墳へ―」『第3回東北・関東前方後円墳研究会大会』75-84 頁
- 穂積裕昌 2012『古墳時代の喪葬と祭祀』雄山閣
- 右島和夫 2008「古墳時代における畿内と東国―5世紀後半における古東山道ルートの成立とその背景―」『研究紀要』第13集 由良大和古墳文化研究協会 27-56 頁
- 和田晴吾 1992「群集墳と終末期古墳」『新版古代の日本』5・近畿Ⅰ 角川書店 325-359 頁
- 拙稿 2003「正直27号墳の石製模造品」『法政考古学』第30集 法政考古学会 289-306 頁
- 拙稿 2005「正直23号墳の石製模造品」『福島考古』第46号 福島県考古学会 33-52 頁
- 拙稿 2007「福島県いわき市の石製模造品工房」『列島の考古学』Ⅱ 155-165 頁
- 拙稿 2008「福島県阿武隈川流域における古墳出土石製模造品」『地域と文化の考古学』Ⅱ 明治大学考古学研究室 493-508 頁
- 拙稿 2009「東国における石製模造品の展開―刀子形の製作を中心に―」『日本考古学』第27号 日本考古学協会 22-55 頁
- 拙稿 2011a「関東地方における古墳出土石製模造品の製作構造について」『考古学研究』第58巻第2号 考古学研究会 54-73 頁
- 拙稿 2011b「石製模造品にみる毛野の特質」『古墳時代毛野の実像 季刊考古学・別冊17』雄山閣 105-109 頁
- 拙稿 2011c「建鉾山祭祀遺跡出土の石製模造品」『福島考古』第53号 福島県考古学会 19-36 頁
- 拙稿 2011d「福島県における石製模造品製作の一樣相―石材産出地周辺の検討から―」『梅檀林の考古学』 259-270 頁
- 拙稿 2012「東国における古墳出土袋斧形石製模造品の製作方法と展開」『古代』第127号 早稲田大学考古学会 129-162 頁
- 拙稿 2015「石製模造品からみた阿武隈川流域における首長層の動向」『阿武隈川流域における古墳時代首長層の動向把握のための基礎的研究』福島大学行政政策学類 31-40 頁
- 拙稿 2017「武具形石製模造品考―石製模造品にみる関東地方と九州・中国地方の一樣相―」『考古学雑誌』第99巻第1号 3-49 頁
- 拙稿 2017『石製模造品から見た古墳時代の葬送と祭祀』（東北大学博士論文）
- 拙稿 2017「他地域との関係性からみた石製模造品における群馬県の特質」『第26回特別展 小さな石のものがたり』群馬県かみつけの里博物館 48-55 頁
- 拙稿 2018「斧形石製模造品の一樣相 特徴的な袋斧形石製模造品の分析を通して」『考古学研究』第65巻第1号 34-54 頁
- 拙稿 2018「福島県郡山市正直27号墳の出土遺物―鹿角製刀剣葬具と鉄鏃を中心に―」『考古学雑誌』第100巻第1号 日本考古学会 51-67 頁
- 拙稿 2019「日下ヶ塚（常陸鏡塚）古墳の石製模造品に関する研究の現状と分析視角」『常陸鏡塚シンポジウム資料集』茨城県大洗町教育委員会 21-30 頁
- 拙稿 2020「福島県郡山市正直27号墳の出土遺物―滑石製白玉とガラス小玉を中心に―」『考古学雑誌』第102巻第2号 日本考古学会 51-72 頁
- 拙稿（査読中）「山形県における石製模造品の展開―八幡山遺跡の石製模造品を中心に―」『古代』 早稲田大学考古学会

[建鉾山祭祀遺跡の性格に触れた主要論考]

- 大場磐雄 1952「東北地方の祭祀遺跡（下）」『古代』第5号 早稲田大学考古学会 14-24 頁
- 亀井正道 1959「信仰から儀礼へ」『世界考古学体系』第3巻 平凡社 145-156 頁
- 相山林継 1972「葬と祭の分化―石製模造遺物を中心として―」『國學院大學日本文化研究所紀要』第29輯 1-39 頁
- 佐田 茂 1988「沖ノ島祭祀の変遷」『古代を考える 沖ノ島と古代祭祀』吉川弘文館 73-98 頁
- 白石太一郎 1995「東国の祭祀遺跡とその遺物」『海の正倉院 沖ノ島』群馬県立歴史博物館 118-121 頁
- 河野一隆 2002「石製模造品」『考古資料大観』第9巻 小学館 331-340 頁
- 比田井克仁 2005「東日本における磐座祭祀の淵源」『古代』第118号 早稲田大学考古学会 45-77 頁
- 岡田裕之 2005「祭祀遺跡における滑石製品」『古墳時代の滑石製品』埋蔵文化財研究会 181-194 頁
- 広瀬和雄 2010『カミ観念と古代国家』角川学芸出版
- 笹生 衛 2016『神と死者の考古学』吉川弘文館

[挿図]

図Ⅲ-2・8～10、図Ⅳ-1：「カシミール3D」（杉本智彦）を元に、「治水地形分類図」（国土地理院）の情報などを加味し作成

表Ⅳ－１ 建鉾山祭祀遺跡の石製模造品出土点数

1966年当時の遺物把握数（亀井正道1966『建鉾山』） 1957・1959年調査

遺跡	地区 トレンチ	石製模造品										紡輪	土師器	他	備考
		刀子	斧	鎌	他	剣	円板	鏡	勾玉	白玉	他				
三森地区第Ⅰ地点	Aトレンチ					3									國學院大學
	Bトレンチ					20	22		1	49	子持勾玉1				
	Cトレンチ					7	4			2					
	Dトレンチ					6	3		2	20					
	Eトレンチ					26	29			178					
	調査以前・首藤保之助氏採集					46	37		2	4315		1	2	ガラス小玉2	須賀川市立博物館
三森地区第Ⅱ地点	調査以前・個人採集		1				2			若干					
三森地区総計			1			108	97		5	4564		1	2		
高木地区	第1・2次調査	6	2	1		76	93	2	2	260	釧1		6	青銅儀鏡1・ 鉄鉾1・鉄剣 3・鉄刀4	國學院大學
	調査以前の遺物	23	24	10		493	425	25	22	18			58		
高木地区総計		29	26	11		569	518	27	24	278			64		
三森地区・高木地区総計		29	27	11		677	615	27	29	4842		1	66		

1988年当時の遺物把握数（表郷村教育委員会1988『建鉾山』表郷村郷土資料集第27集）

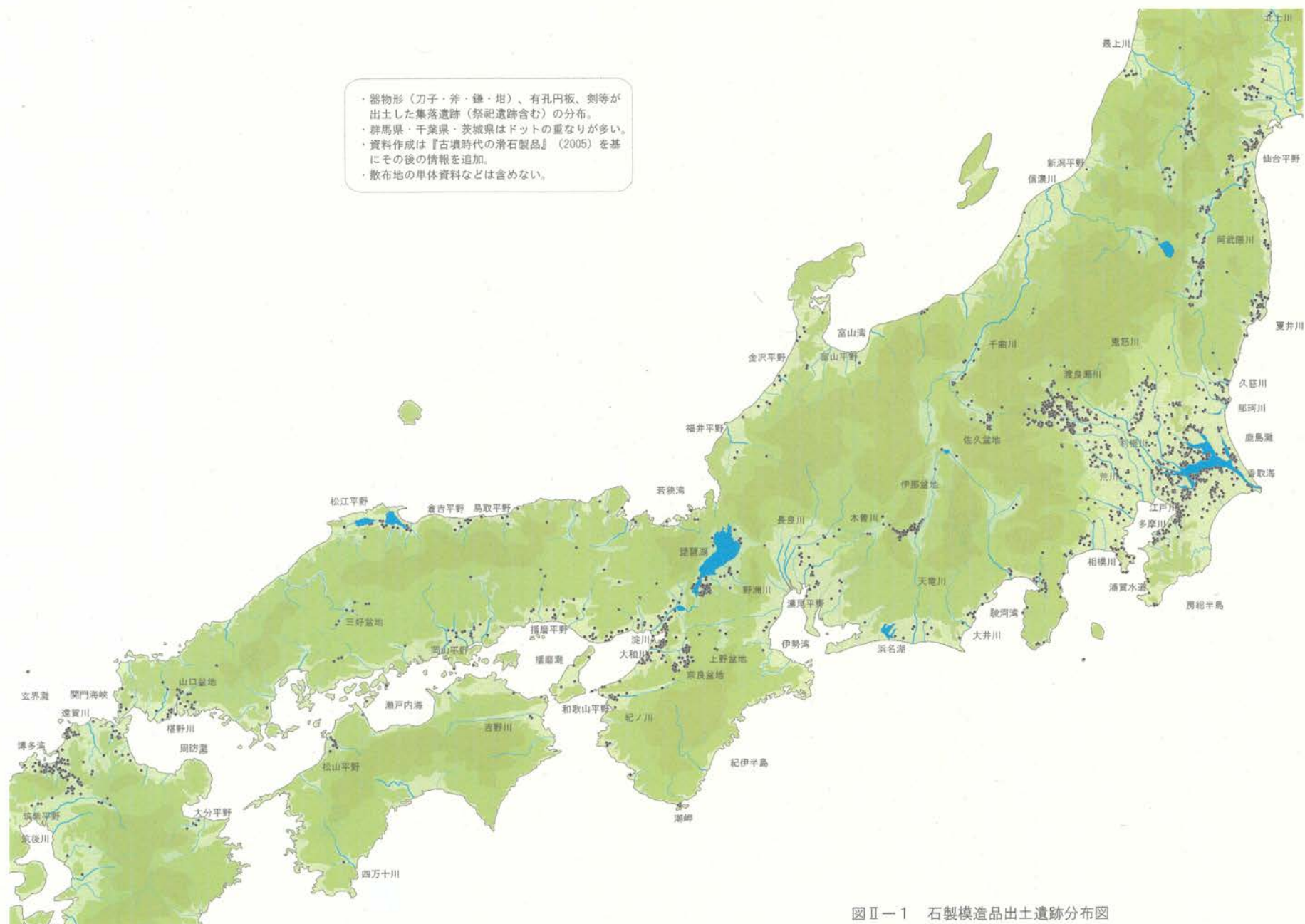
遺跡	地区 トレンチ	石製模造品										紡輪	土師器	他	備考
		刀子	斧	鎌	他	剣	円板	鏡	勾玉	白玉	他				
「高木地区と三森地区の区分けが困難なため一括集計」	個人	1				10	26	1	3	7			4		白河市教育委員会
	個人	1				4	3						6		白河市教育委員会
	個人	2				10	37	1	2	200				鉄剣残欠2	
	個人					50	54	1	1	1687					
	個人		1			15	15			100					
	個人												1		
	個人					22	6			418					
	個人	8	11	3		141	275	7	6	2480			16		
	表郷村公民館	1	4			28	45	2		786					白河市教育委員会
	須賀川市立博物館					46	37		2	2814					須賀川市立博物館
	國學院大學	6	2	1		138	151	2	3	509	釧1		6		國學院大學
	総計	19	18	4	0	464	649	14	17	9001	0	0	33		

表郷村教育委員会による2回の調査（表郷村教育委員会1997『建鉾山Ⅱ』／1999『三森遺跡発掘調査報告Ⅱ』）

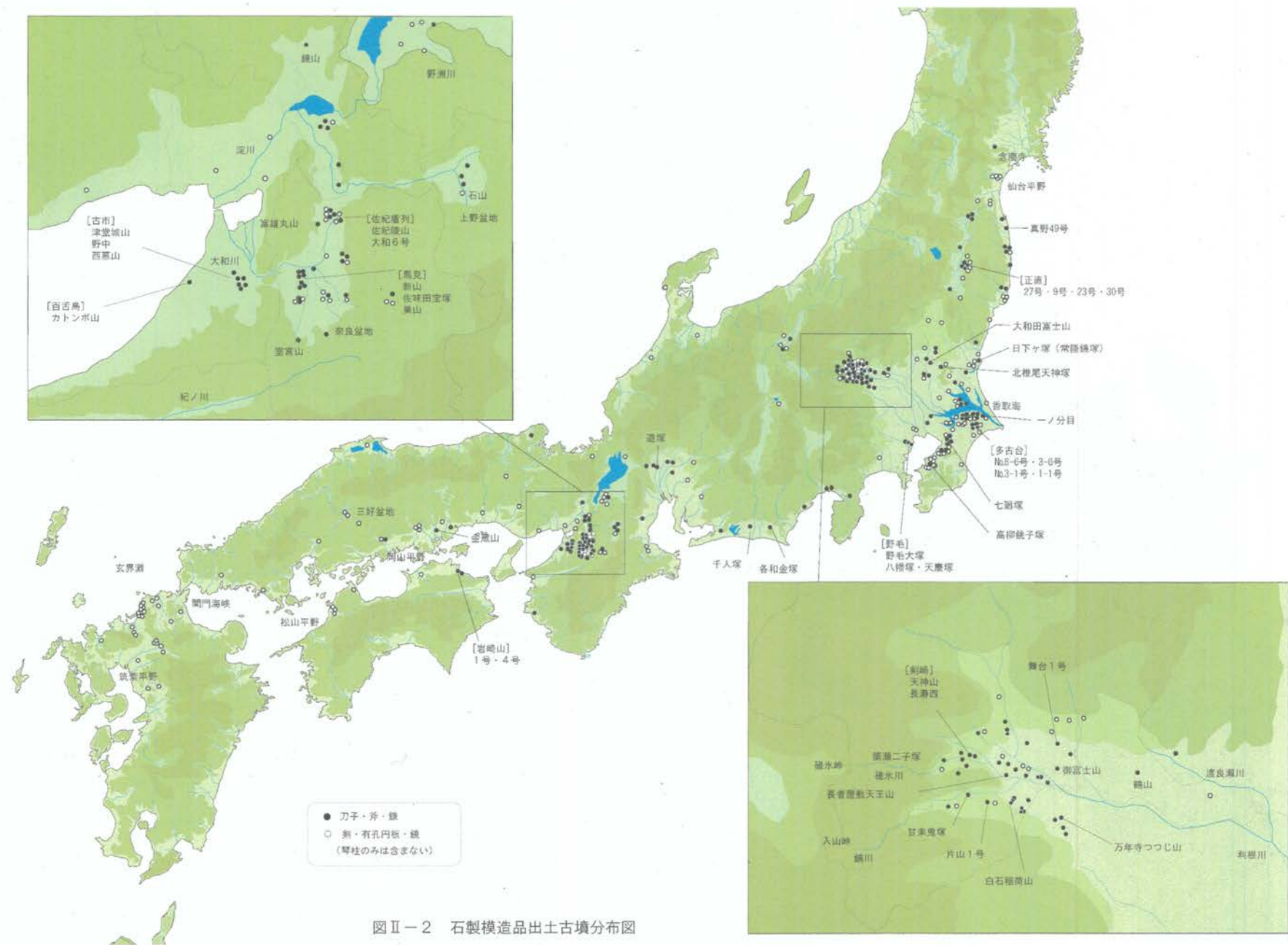
遺跡	調査年	石製模造品										紡輪	土師器	他	備考
		刀子	斧	鎌	他	剣	円板	鏡	勾玉	白玉	他				
三森遺跡	1994・1995年調査	1		1		60	92		8	3	管玉1	3			白河市教育委員会
三森遺跡	1998年調査						4		1	1					白河市教育委員会

2011年当時表郷村に所在する遺物（白河市 2011『表郷村史 第2巻 資料編』） 國學院大學蔵は含まない

遺跡	石製模造品										紡輪	土師器	他	備考
	刀子	斧	鎌	他	剣	円板	鏡	勾玉	白玉	他				
建鉾山祭祀遺跡と三森遺跡	11	15	4		258	266	10	7						



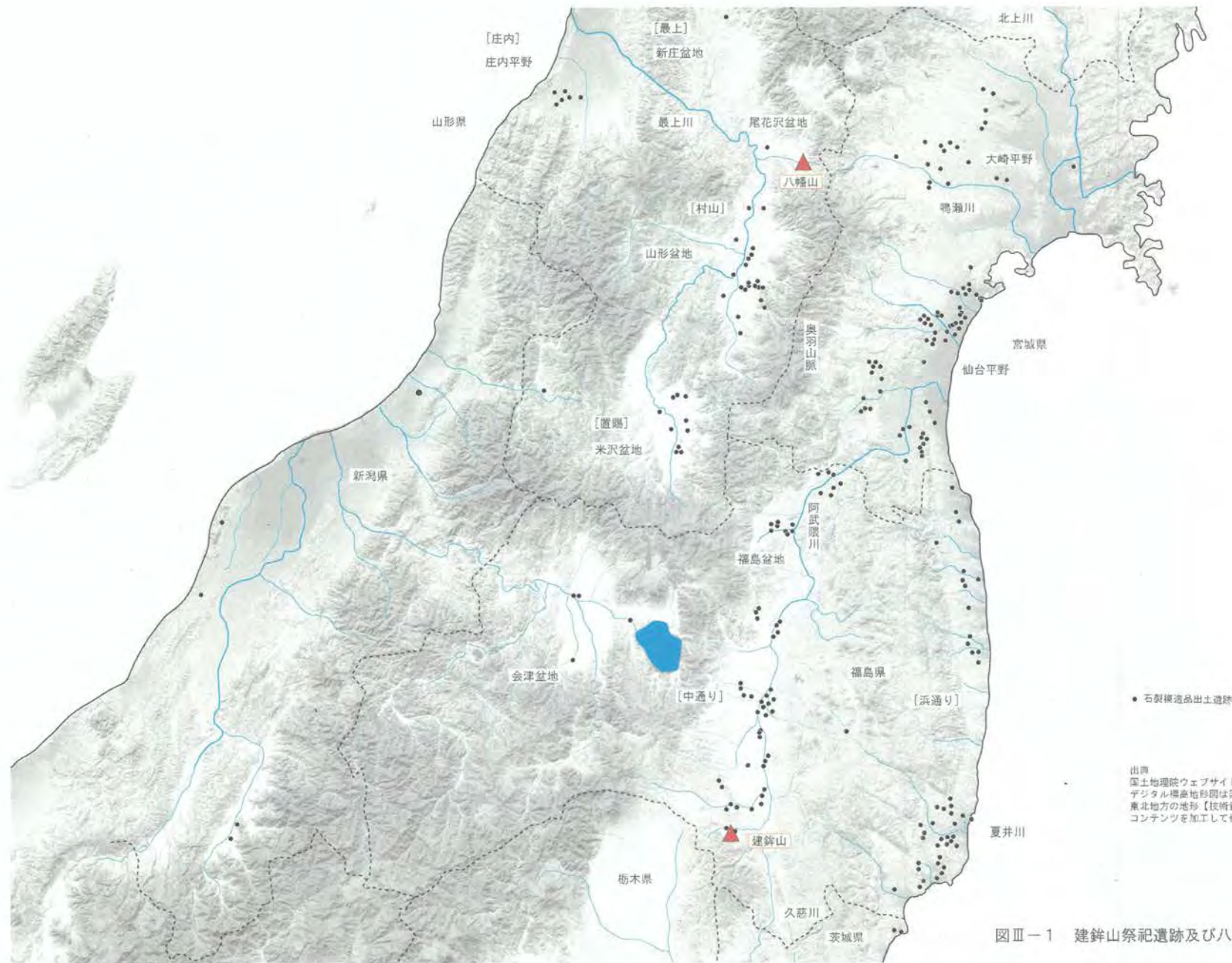
図Ⅱ-1 石製模造品出土遺跡分布図



図Ⅱ-2 石製模造品出土古墳分布図



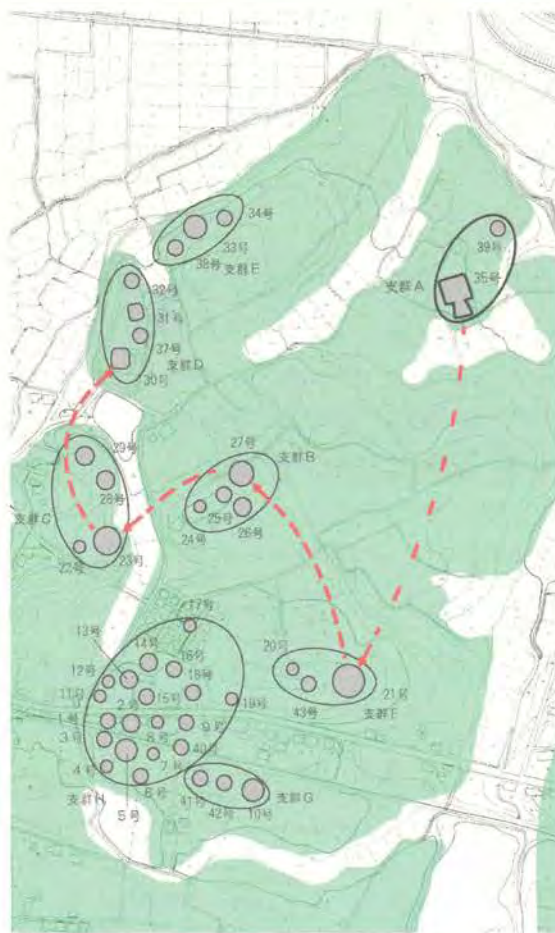
図Ⅱ-3 県別石製模造品出土出土遺跡数



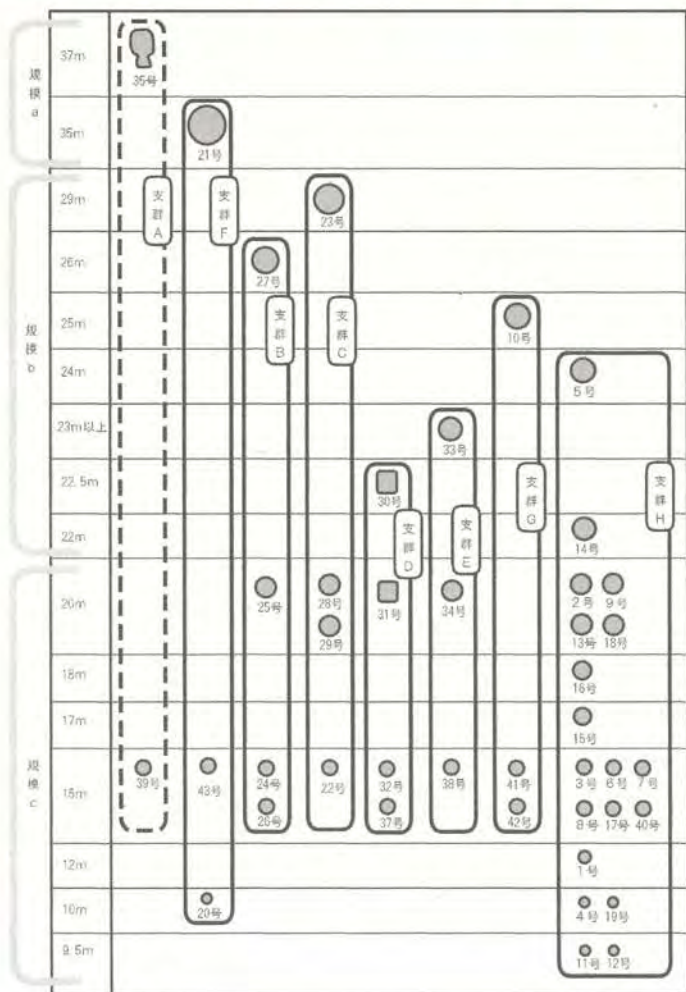
図Ⅲ－１ 建鉾山祭祀遺跡及び八幡山遺跡位置図



郡山東部の主要遺跡分布

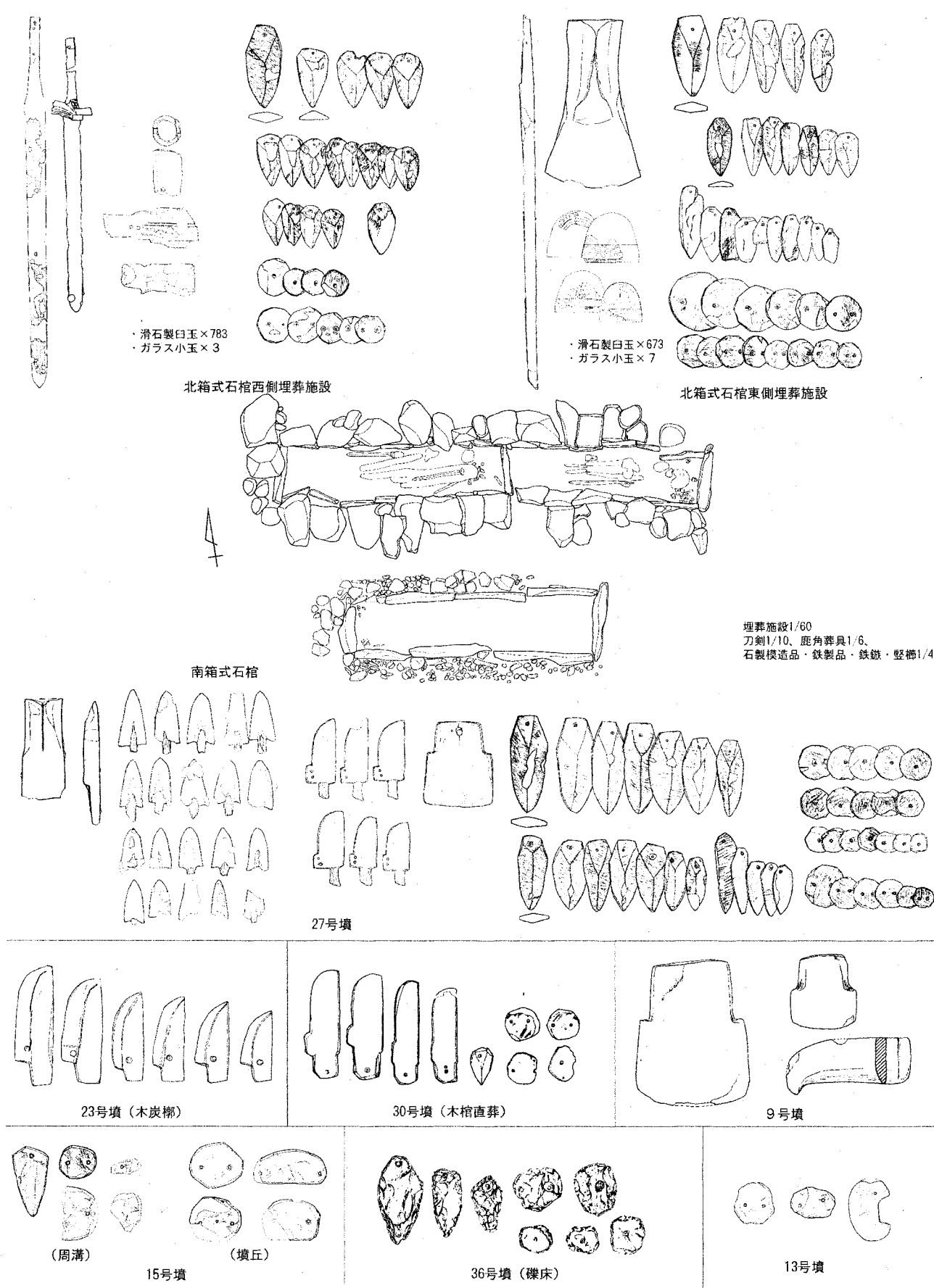


古墳分布図



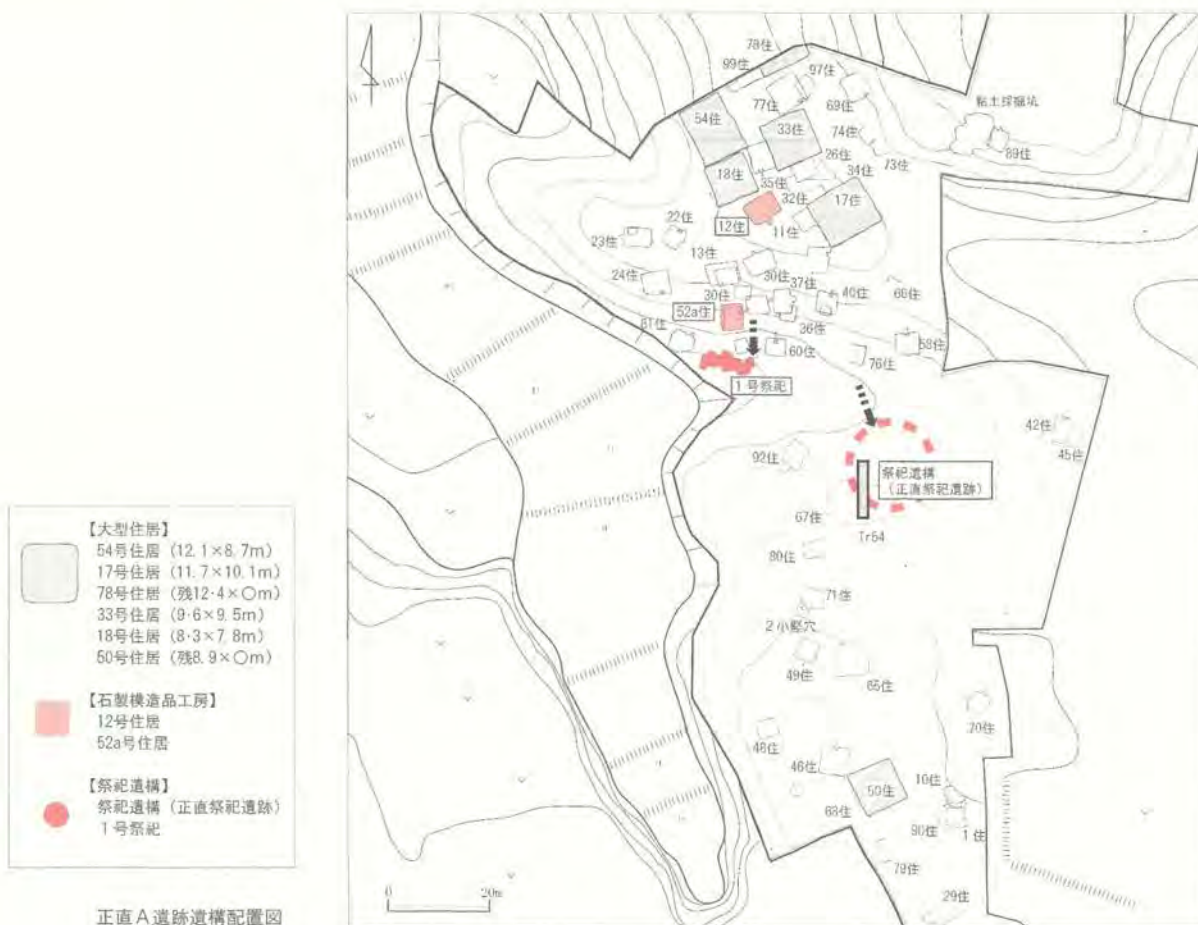
古墳群構成図

図Ⅲ-2 正直古墳群古墳分布図及び群構成図



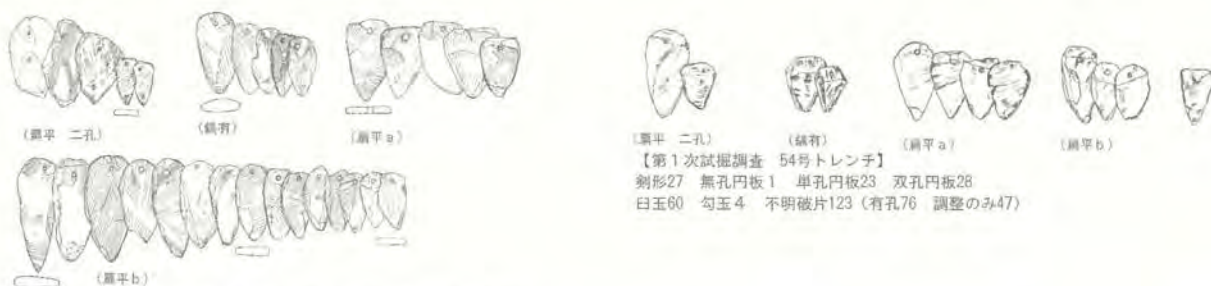
図Ⅲ-3 正直古墳群出土石製模造品

(縮尺1/4)



祭記遺構における石製模造品出土数

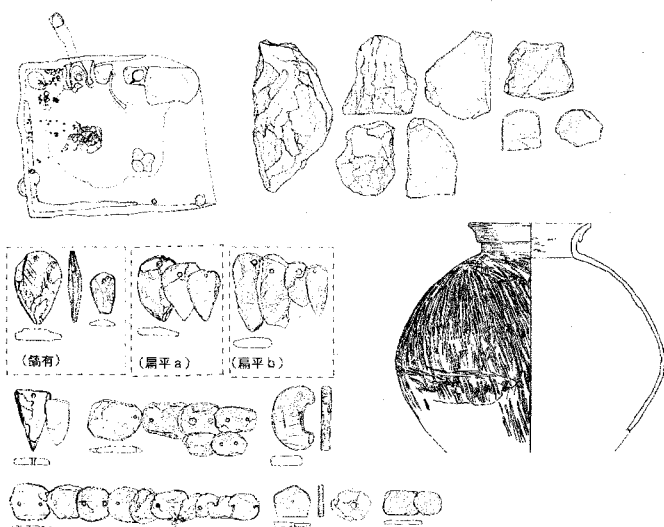
	出土遺構・地点	剣形	有孔円板 双孔 単孔	勾玉	白玉	防犯車	他 (未成品等)
祭記遺構 (正直祭祀遺跡)							
昭和24年 首藤保之助調査	A・B地点	242	154	5	10+		子母勾玉1 鏡形1
昭和31年 國學院大学調査	トレンチ	61	74		24		形状不明破片200
昭和58年 福島県第1次試掘調査	54トレンチ	27	3 19	2	60	1	剣形11 勾玉1 欠損未製品33
平成4年 福島県発掘調査	遺構外	57	55 35	25	168	4	剣形未製品5 円板未製品1 不明未製品4
1号祭祀							
平成4年 福島県発掘調査	1号祭祀跡	36	77 16		122		剣形未製品2 円形未製品3 白玉未製品1 雪玉状1 剣片11



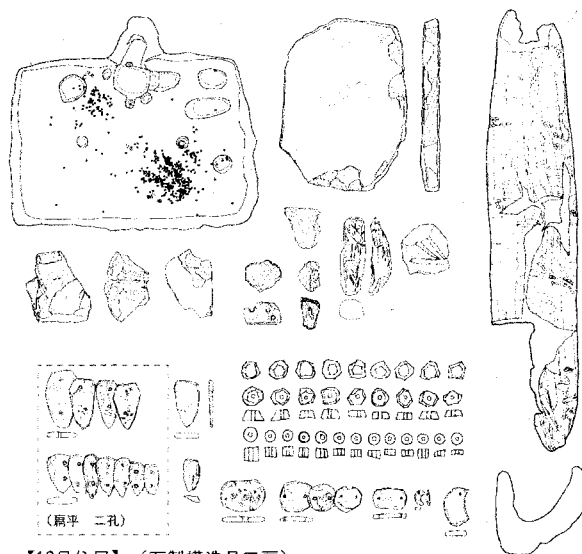
【正直A遺跡発掘調査 遺構外】(多くは「正直祭祀遺跡」付近の出土)
 剣形57 剣形未製品5 双孔円板55 単孔円 (方形) 板35
 円板未製品1 勾玉形21 白玉168 不明未製品3

0 5cm
 (1/5)

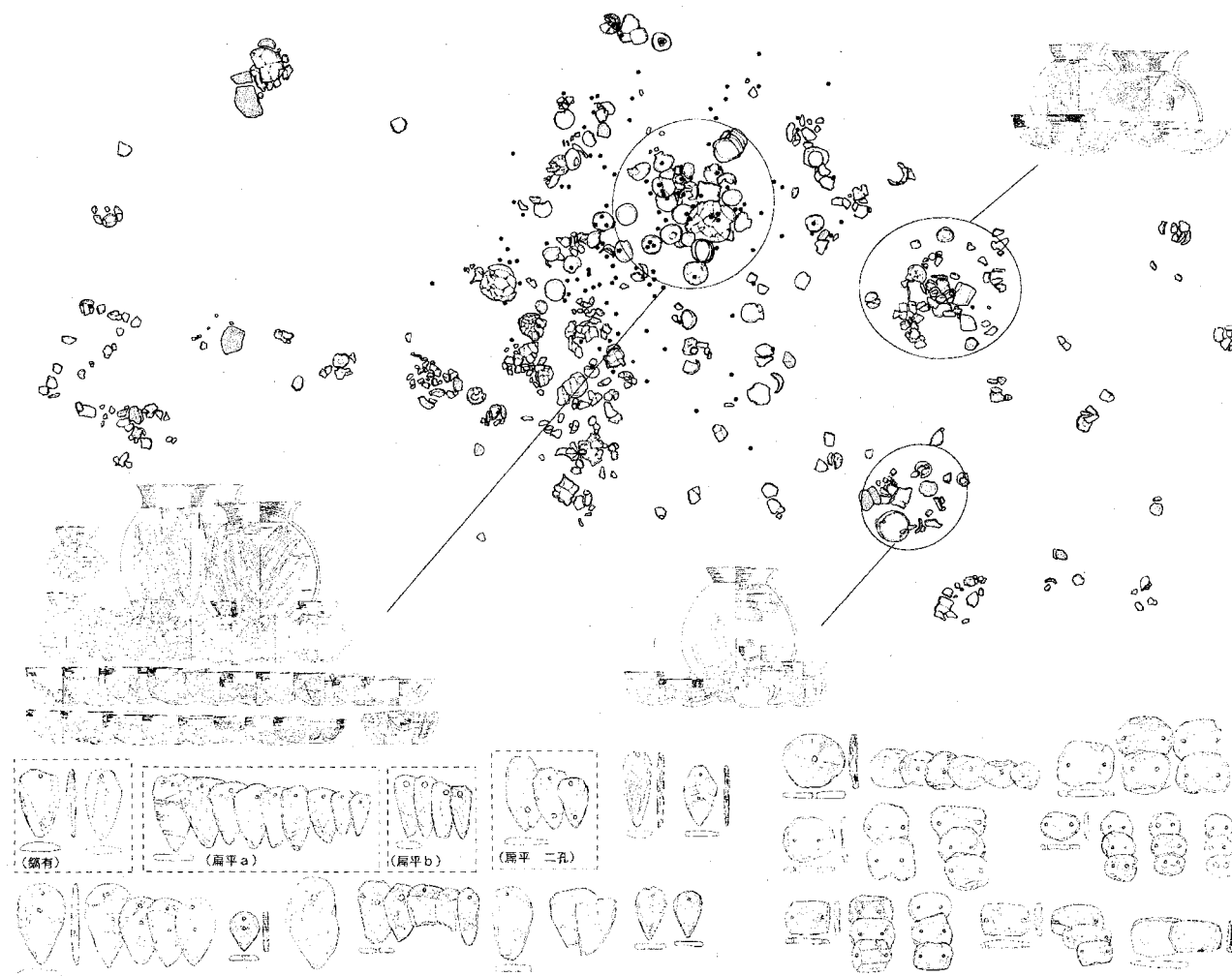
図Ⅲ-4 正直A遺跡の石製模造品



【52a号住居】（石製模造品工房）



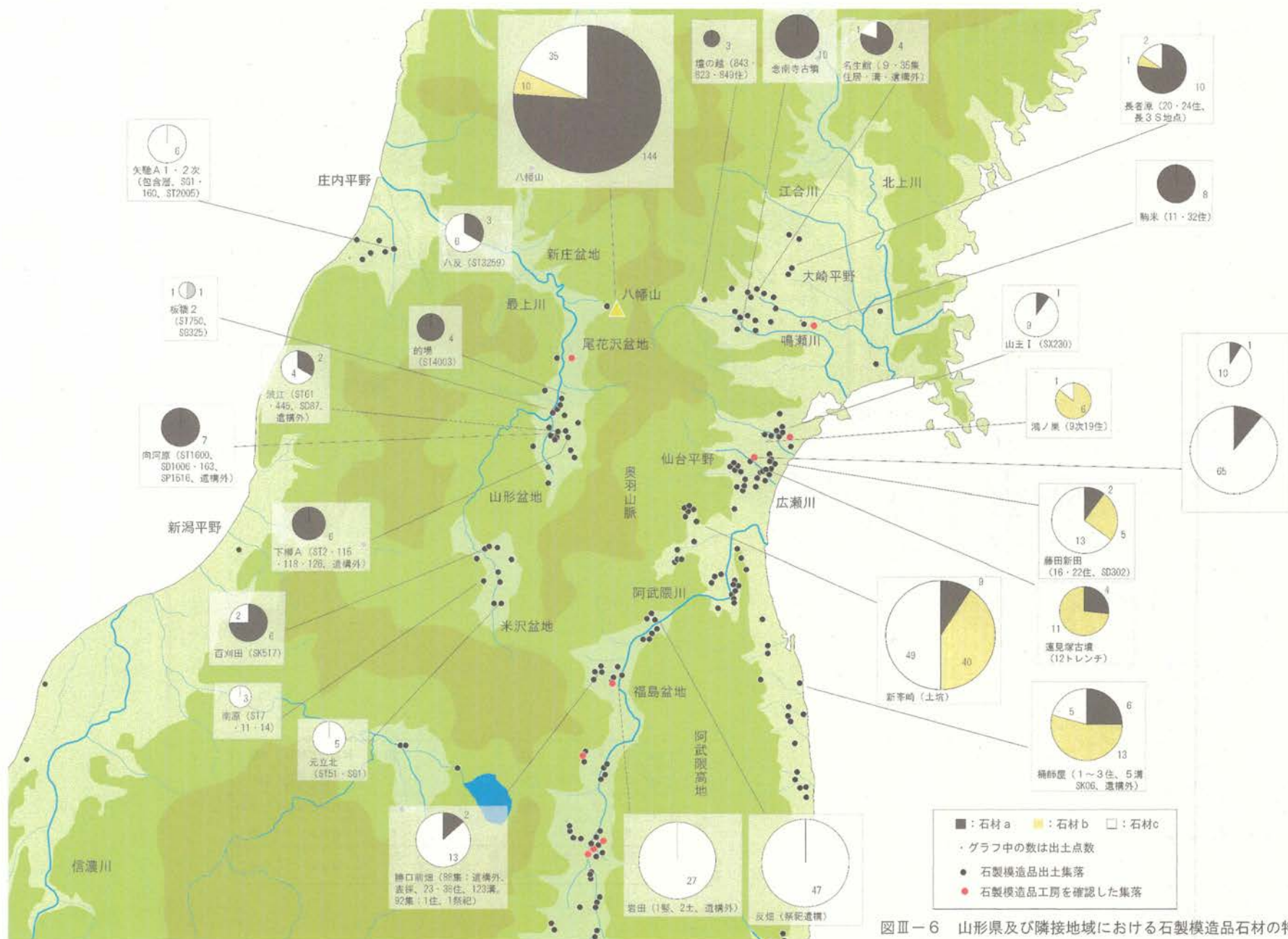
【12号住居】（石製模造品工房）



1号祭祀

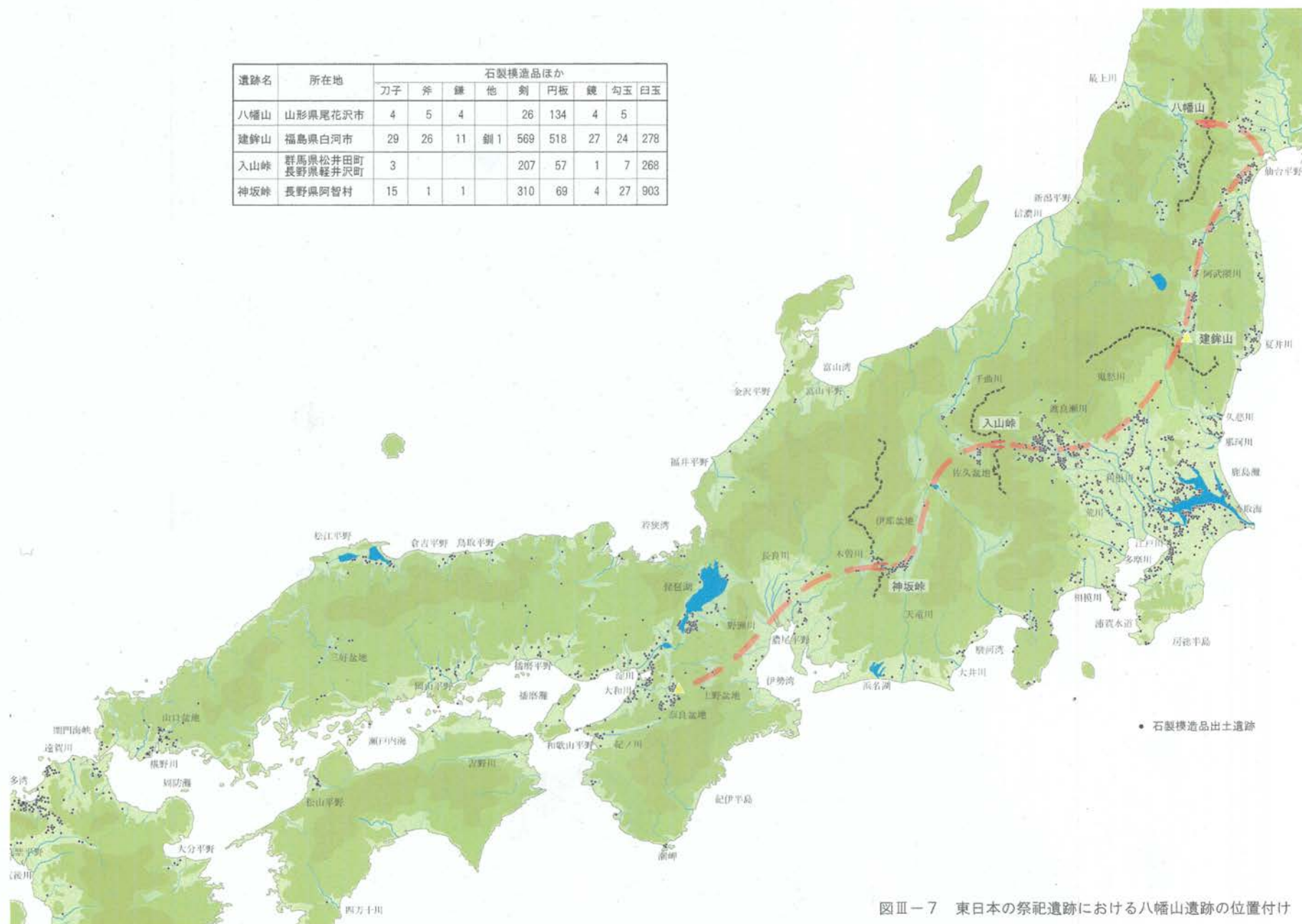
（住居跡1-200、遺物分布図 1/60、土師器1/16、土製品・磨石1/10、剥片・製品1/6、白玉1/3）

図Ⅲ-5 正直A遺跡の概要（石製模造品工房と祭祀遺構）

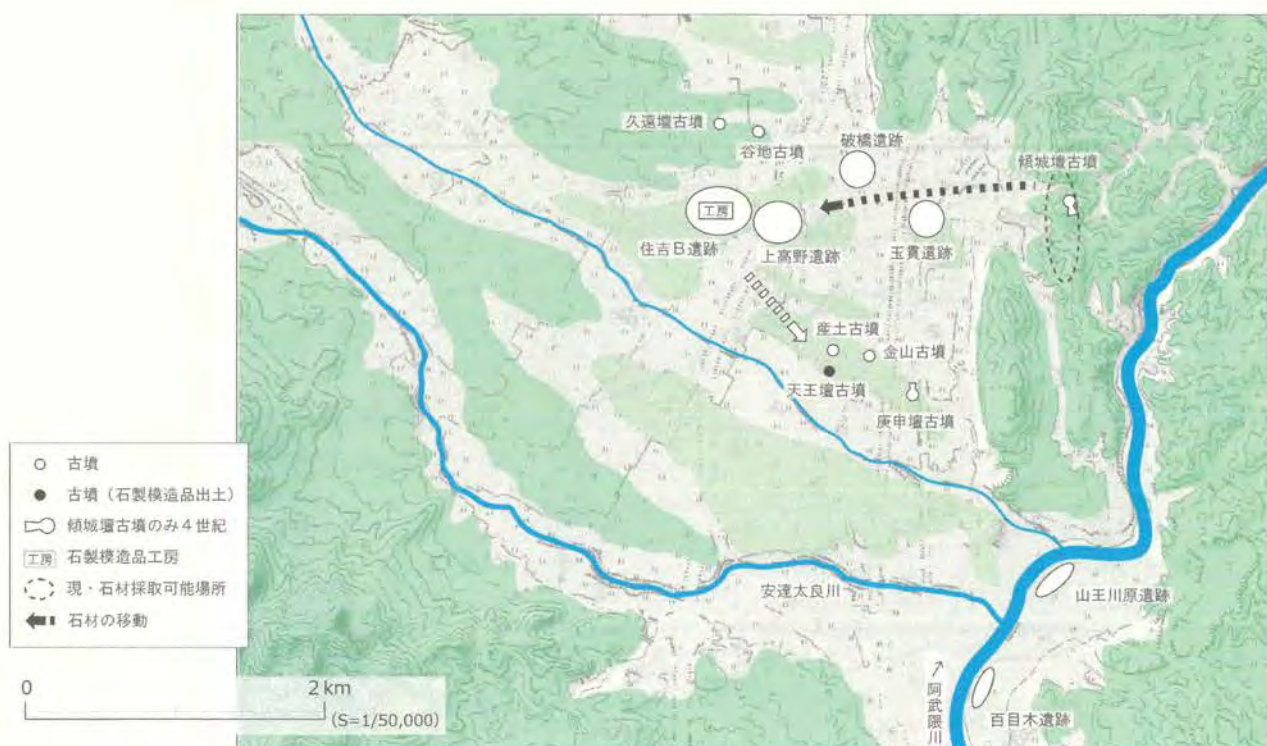


図Ⅲ-6 山形県及び隣接地域における石製模造品石材の特徴

遺跡名	所在地	石製模造品ほか								
		刀子	斧	鎌	他	剣	円板	鏡	勾玉	白玉
八幡山	山形県尾花沢市	4	5	4		26	134	4	5	
建鉢山	福島県白河市	29	26	11	銅1	569	518	27	24	278
入山峠	群馬県松井田町 長野県軽井沢町	3				207	57	1	7	268
神坂峠	長野県阿智村	15	1	1		310	69	4	27	903



図Ⅲ-7 東日本の祭祀遺跡における八幡山遺跡の位置付け



(住居跡1/200、須恵器1/8、石製品1/5)

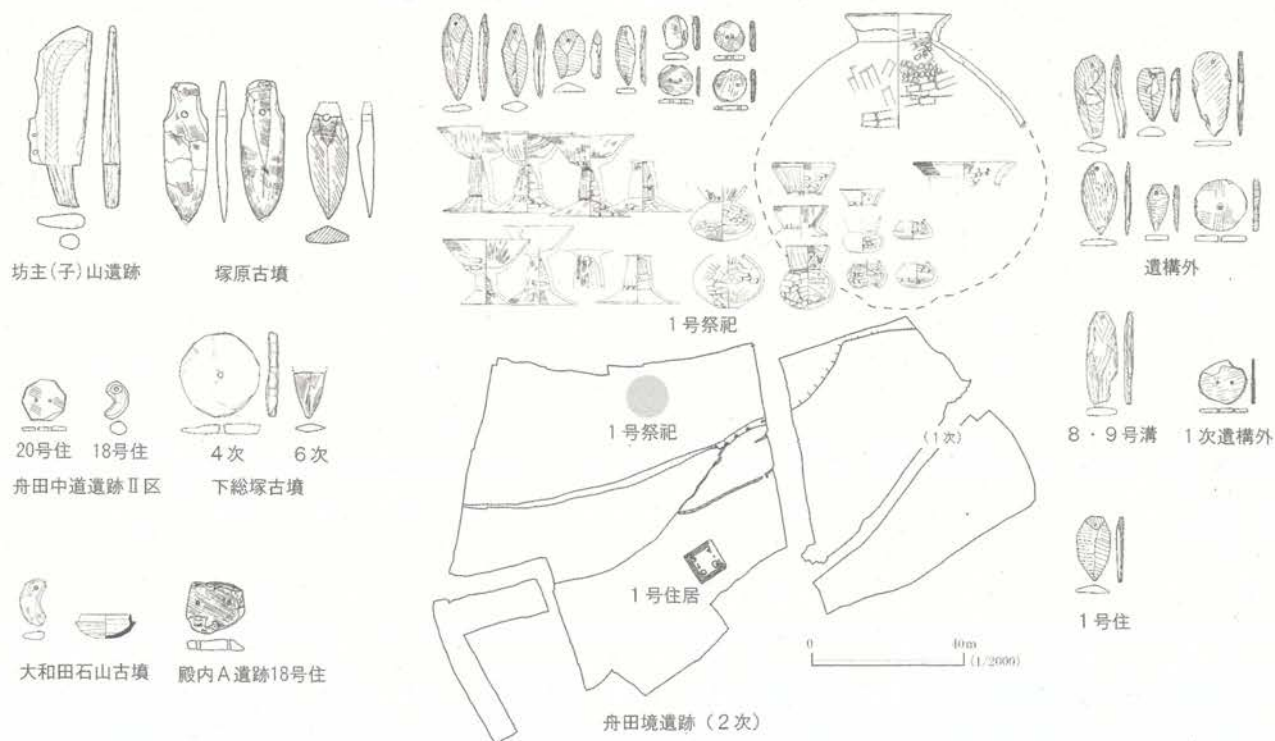
図Ⅲ-8 大玉村・本宮市における関連遺跡の動向



図Ⅲ-9 いわき市における関連遺跡分布図



図Ⅲ-10 福島盆地北部における関連遺跡分布図

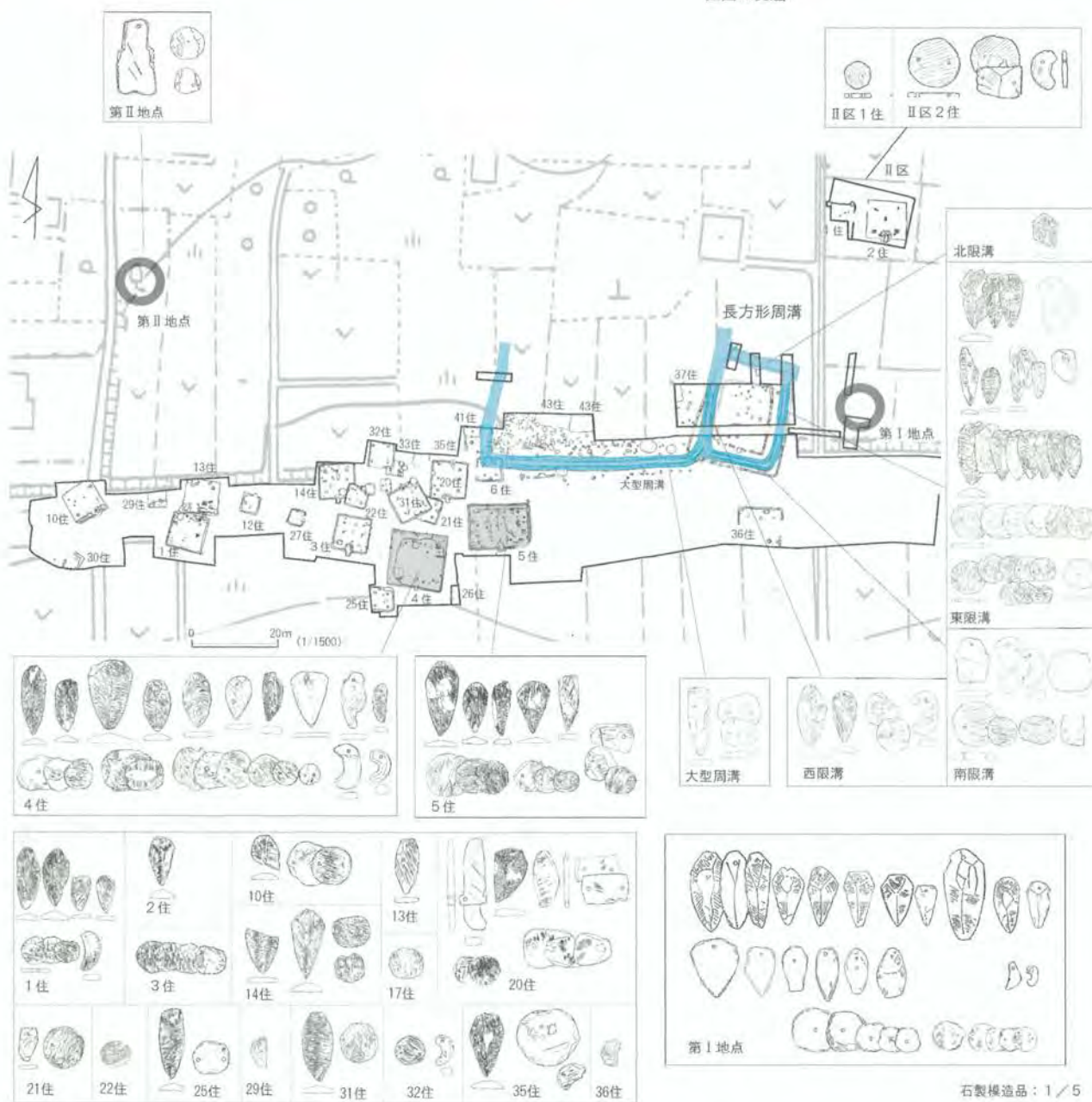


石製模造品1/5 土器1/16

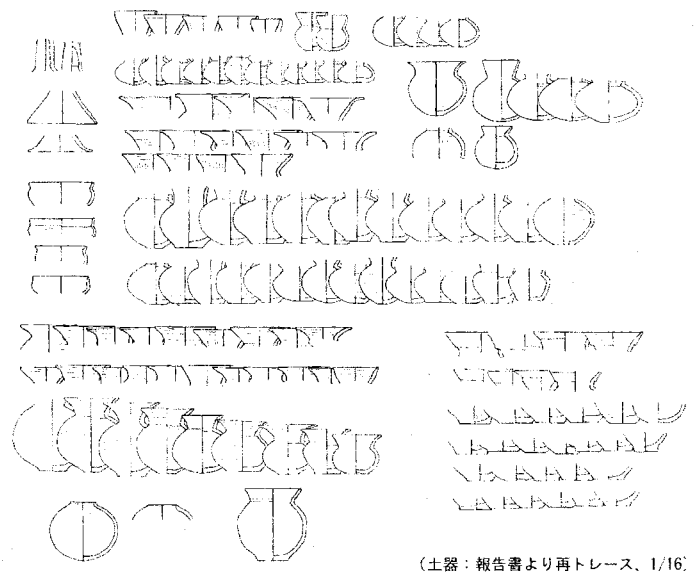
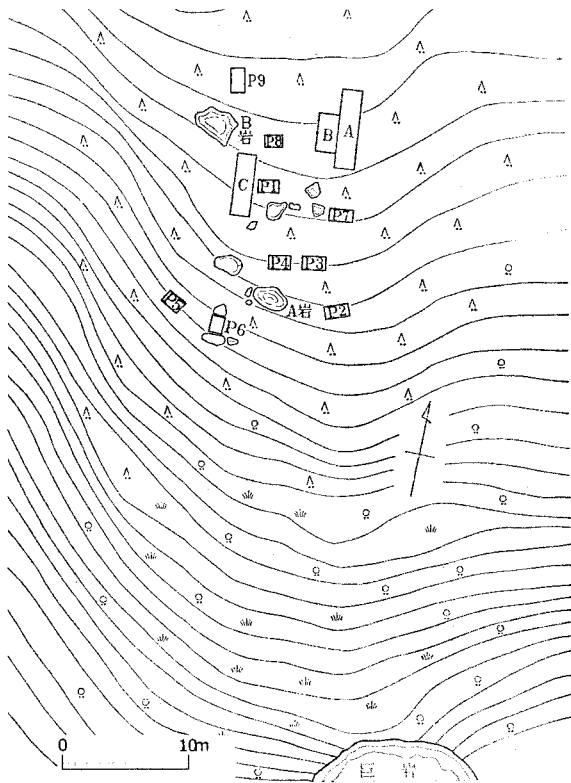
図Ⅳ-1 福島県南部における石製模造品の概要



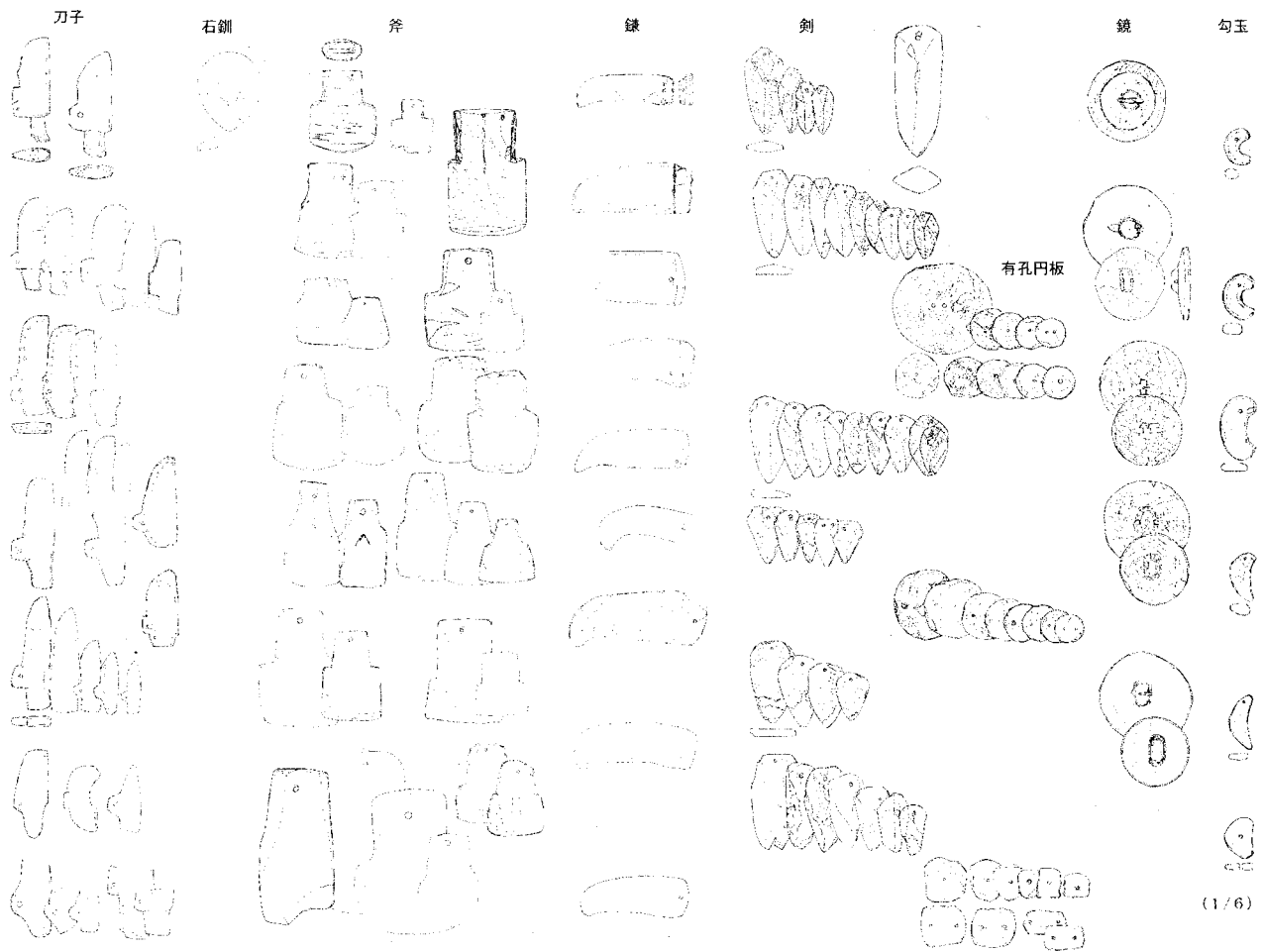
区画の変遷



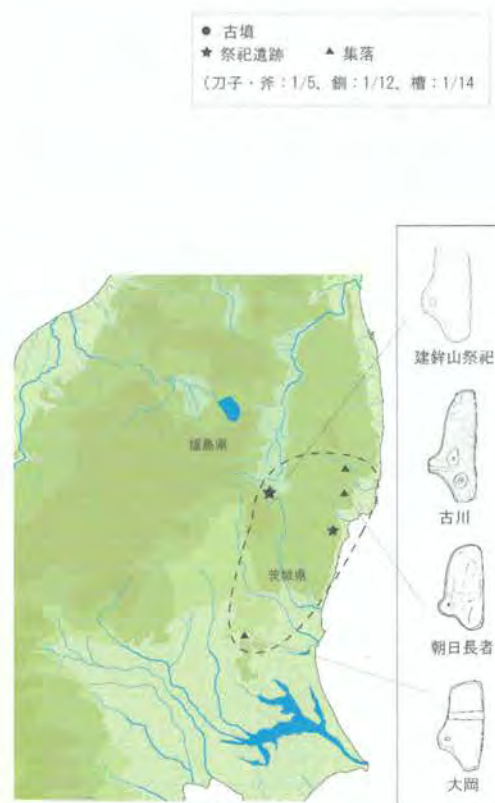
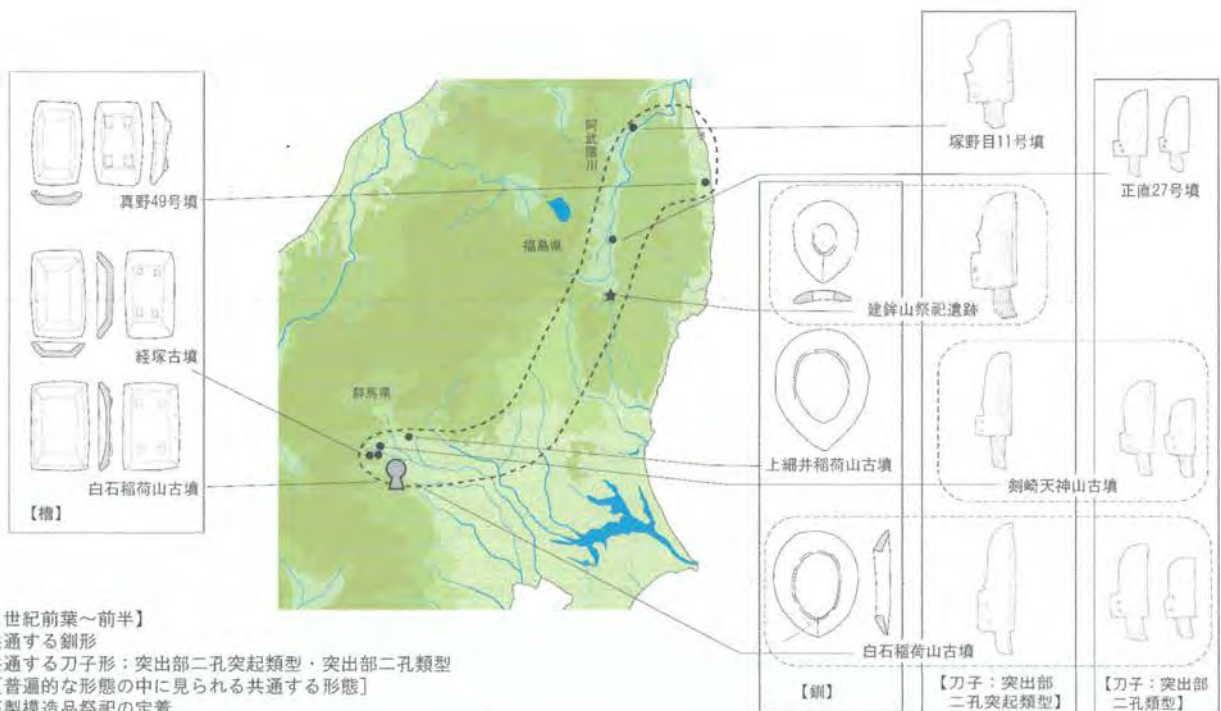
図IV-2 三森遺跡出土石製模造品



(土器：報告書より再トレース、1/16)



図Ⅳ-3 建鉾山祭祀遺跡の石製模造品



図IV-4 建鉾山祭祀遺跡の展開